

# 高島小学校のスクールボランティアは、どんな団体??

高島小学校のスクールボランティアは、平成18年1月30日に、読み聞かせボランティア「とうぐみの会」を母体として発足しました。地域の子どもは、地域で守

り育てるということ。親や地域の人々が学校を応援し、教職員の応援団になるということが活動の原点になっています。

↓バラエティーに富んだ活動内容を掲載してみました↓

### 読み聞かせ

平成12年10月から「とうぐみの会」として活動を開始。週2回の読み聞かせをしています。メンバーが自主的に日程を調整し、読み聞かせを行っています。



朝の15分間、すべての学年に年間約45回の読み聞かせを行っています



### 給食費集金隊

平成17年から開始。毎月、集金日に子どもたちから集金します。



集金の後は、各学年ごとに集計します。先生たちが集金業務に費やす時間も削減されました

### 授業支援隊

学校側から要望がある授業の補助をします。

→臨海学校用のナップサックをミシンで縫う授業で、子どもたちにミシンの使い方を教える手伝いをしました。

### 安全支援隊

1年生入学時の2週間、地区別の下校に付き添います。月1回の集団下校にも付き添っています



### おたのしみ支援隊

茶道や着付け、将棋、昔の遊びなどを子どもたちに体験してもらいます。PTAと協力して「キャンドル・ナイト」も毎年開催。



放課後のお茶会は、子どもたちに大人気



幻想的なキャンドル・ナイトもお楽しみ

### 総合支援隊

総合の時間の川学習にボランティアとして参加します。



### 夏休みの宿題支援隊

大学生や高校生、中学生が子どもたちの夏休みの宿題を手伝います。



校長先生にお話を伺いました Interviewer

### スクールボランティアの皆さんの借しめない協力に、いつも感謝

「スクールボランティアの皆さんの協力には、毎回とても感謝しています。このことは高島小学校の子どもたちが、地域の人たちにいつも温かく見守られている証なのです。実際、臨海学校用のナップサックをミシンで縫う授業を、皆さんに手伝ってもらったこともありました。こうしたボランティアの皆さんのおかげで、子どもたちは貴重な体験や、地域の絆を感じることができるのです。今後も、ボランティアの皆さんと学校との連携強化を図ってまいります」



高島小学校・校長 小林信二さん Shinji Kobayashi

### 父親支援隊

父親同士の交流も兼ねて行っています。父親たちが、自主的にサークル「おやじの会」を発足させました。

→親子で楽しめる流しそうめんなどの企画も、毎年盛りだくさんです。



すべては、子どもたちの健やかな成長のために・・・



# 子どもたちを見守る目線

●高島小学校のスクールボランティアを取材して●

MACHIKADO REPORT No.194

## 街角特派員レポート

今回の街角特派員レポートは、高島小学校のスクールボランティアを取り上げます。街角特派員の浅海優子さん自身も高島小学校で、絵本の読み聞かせボランティアを始めたばかり。そんな新米スクールボランティアの浅海さんの視点から、街角特派員レポートをお届けします。

Yuko Asagai



街角特派員 浅海優子 (秋妻・17区)

「どんなことをしているのかな」「ボランティアの人は、どんな気持ちで参加しているのかな」。もつと知りたくなりました。自分の子どもは…、高島小学校の子どもたちは…、どれだけの地域の人たちに見守られているのかということ。

学校運営を子どもたちのために、サポートするスクールボランティア。友達からのお誘いをきっかけに私も、絵本の読み聞かせをしている「とうぐみの会」に参加し始めました。私もボランティア一年生。娘と同じ一年生です。スクールボランティアは、ほかにもいろいろな活動をしているようです。

「ボランティアのかたと、たくさんおしゃべりしながら来たから、ぜんぜん疲れなかった」と言う娘。ありがたいと思いました。それが、私が最初にした高島小学校のスクールボランティアでした。

ちょうど一年前のこと。小学校へ入学したばかりの娘が、初めて歩いて帰って来るのを出迎えるために、通りへ出て待っていました。重たそうなランドセルを背負い、手下げかばんを引きずりそうになりながらも、黄色い帽子の中の顔はニコニコとなんだか楽しそう。

ボランティアのかたと、たくさんおしゃべりしながら来たから、ぜんぜん疲れなかったと言う娘。ありがたいと思いました。それが、私が最初にした高島小学校のスクールボランティアでした。

Mitsuko Nishizawa



スクールボランティア  
西澤光子さん(大塚)

「できることをできる範囲で」とメンバーのかたからアドバイスがあったから一歩を踏み出し、読み聞かせを始めることができた、西澤さんは話します。コーディネーターの吉田さんからも常に、無理をしないでもできる範囲でいいので、と優しく声をかけてもらえるので、ほっとして不安な気持ちが和らぐのだそうです。

絵本を手取る機会もなくなっていたのに、子どもたちにおもしろいと思ってもらえる絵本を探しに本屋や図書館へ足を運ぶことが、楽しみの一つになっていと言います。「朝の短い時間だけれど、子どもたちに見えることがうれしくて、たくさんのエネルギーをもちって頑張ろうと思うようになりました」と西澤さん。

やれる範囲で参加するようになり、スクールボランティアも4年目になりました。自分の世界が広がり、ボランティアをしているというより、させてもらっている、ありがたさという気持ちで今はいっぱいだと思います。



↓六年生を送る会の本番へむけて、リハーサルを繰り返すボランティアの皆さん。練習に余念がありません



↑子どもたちの真剣な眼差しや、ときに見せる笑顔が読み聞かせを続けられる原動力です

たくさんの絵本と出会うので、いつも楽しみです



丸山遥香さん(高島小学校3年) Haruka Maruyama

「読み聞かせの時間がいつも待ち遠しいです。ページがめくられるたび、次の展開が気になりわくわくします。『3びきのかわいいオオカミ』の絵本がおもしろくて、わるいおおきなブタが出てくるところにはびっくりしました。最近では、英語の読み聞かせもお気に入りです」

絵本を読むことは、本の内容を声に乗せて届けることです

読み聞かせにはテクニックと体力が必要。絵本の内容50%、話し手の技術50%



読み聞かせ終了後は皆さんが集まり、その日の子どもたちの様子や、読んだ本の名前などを記録ノートに書き込みます



PROFILE

あかぎかこ ● 児童文学評論家。1984年に、子どもの頃に読んでタイトルや作者名を忘れてしまった本や文化の紹介、評論などで全国を飛び回っている。著書多数。

● 赤木かんこさん  
ただ読むだけでは意味がない  
自己満足で終わってしまう

読み聞かせには、テクニックと練習が必要です。声は放物線を描いて落ちていく、一番後ろの人の頭を越すような音量を、出すことが求められます。

高学年になるとつれ文章も長文になる。息が続かないと、変なところで息継ぎをして文章を切ってしまう、内容が伝わらなくなりそうです。読み手のつらさは、聞き手にもうつります。読み手がぐちゃぐちゃしていると、子どもたちも気持ちよく内容に入り込めるのです。テクニックを学ぶには、時間がかかります。自己満足の読み聞かせでは、子どもたちは決して絵本に目を輝かせることはないのです。先生や親が知らない絵本を、子どもたちに読み聞かせするの、大切です。絵本にもトレンドがあることを知ってほしいです。

Yasuko Yoshida



コーディネーター  
吉田保子さん(一本木・18区)

「だって、楽しいから！」

スクールボランティアの立ち上げを考え、実行に移すまでに学校との連携をとる役割を担うコーディネーターという資格をメンバーの月岡さんと共に取得してから、スクールボランティアの活動は8年目になる吉田さん。

スクールボランティアの活動を企画し、学校側へ提案して、子どもたちに何がしてあげられるのか話し合いながら、今に至るそうです。

ボランティアを立ち上げたこともすごいエネルギーが必要だと想像しますが、今日まで、ボランティアを継続してこられたことも、それ以上に大変ではなかったかと思えます。どんな情熱があつて続けてこられたのかを、お聞きすると、答えは予想外にも簡単に「だって、楽しいから！」笑顔の一言でした。

いろいろな人がいろいろな形で参加するボランティアなので、日程調整や連絡など大変に思うこともあるそうです。でも、人が集まって子どもたちとふれ合っているのが楽しくなり、やっ

できることを、できるときに  
できる範囲で 無理なくできるから継続できる

高島小学校のスクールボランティアの皆さんは、「どんな気持ちで参加しているのでしょうか。そして、活動へと導くその原動力とは何か」お話を伺ってきました。



↑週2回ペースで朝の15分間すべての学年で読み聞かせをしています



よかったという充実感でいっぱいになるそうです。

「頼めば、いいよと言って手伝ってくれるメンバーや、地域のボランティアさんがいるからやってこられた。新しい出会いや、仲間ができることがうれしくて、続けてこられたのかな？」と、物腰の優しい話し方の吉田さんが学校側とメンバーとの懸け橋をしてくれているから、みんな安心して関わりを持っているのだと実感しました。

スクールボランティアが学校に入り込んでいる姿を、先生も子どもたちも温かく、自然に受け入れてくれていると感じるようになったそうです。

今日も吉田さんは、最後まで残り、後片付けをして、職員室へ挨拶に行きます。だれにも責任を押し付けず、無理なことを要求しない懐の深さを見た気がしました。



↑3月7日行われた六年生を送る会には、挿絵を投影しながら「こんきつね」を朗読。六年生の卒業メッセージも読み上げました

「だって、楽しいから！」  
無理することなく、細く長く

スクールボランティアの立ち上げから参加して8年目。関口さんは、楽しさの方が大きいから、ここまで続けてこられたと実感しているそうです。「今度は何やるの?」と、声をかけてくれる子どもたちの自然な笑顔を見られることが自分への褒美。やりがいにつながることを話します。

安全支援隊として、下校の付き添いで一緒に歩いていると、鳥や花などいろいろなものを見つけ、子どもとその楽しさを共有したり、健康維持にもなったり、一石二鳥なのだとか。

「ボランティアをしていると、いろいろな人との出会いがあつて楽しい」と言つて笑う関口さん。お孫さんという年齢のかたたちの中には、ボランティアを通してお友達になり、人の輪ができた人もいます。スクールボランティアは、出会いの場にもなることが分かりました。

「無理することなく、細く長くやっていくことが大切」と関口さんは強調します。

Kazuo Sekiguchi



スクールボランティア  
関口和枝さん(磯沼・19区)



↑けん玉を教わる子どもの目も真剣です



←お手玉をさわるのも初めての子どもにとって、よい機会になりました



↑だるま落としにも興味津々でした

## 昔の遊びを一緒に楽しもう

「昔の遊びを子どもたちに伝えよう」という一年生の授業にスクールボランティアの皆さんが協力。子どもたちと一緒に、けん玉やお手玉、だるま落とし、おはじき、羽子板、紙風船などで遊びました。にぎやかな笑い声が、体育館中に響きわたっていました。



### 初めてボランティアに参加、ふれ合いの機会に



**澁井有三さん** (秋葉・17区) **Yuzo Shibui**  
「ボランティアに初参加しました。これまで通学路で見かけるだけの子どもたちと、ふれ合う機会はありませんでした。今日は、昔なつかしい遊びを通して、子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごせました。これからは、できる限り私も協力したいです」



子どもたちは夢中になって遊び、ボランティアさんとも交流を深めていました



お手玉上手にできるようになったあ



お茶会では、お抹茶の点て方などの基本も教えてくれます



↓お抹茶を点てる時、「おいしくなれ、おいしくなれ」と思う気持ちが大切



## 茶道からおもてなしの心を

おたのしみ会のひとつお茶会。どんな様子が訪ねてみました。年3回行われているこのお茶会は、谷津洋子さん指導のもと、子どもたちが本格的なお茶の雰囲気味わえるよう、本物の茶道具を使ったり、空間作りを工夫したりしていました。

おたのしみ会 放課後のお茶会へ  
授業が終わり、お楽しみ会に参加する子どもたちはブレイルームを目指して、うれしそうに笑顔で集まって来ていました。スクールボランティアさんは、入り口で子どもたちを出迎え、ゆつくりとお茶会の雰囲気の中へ誘います。  
子どもたちは挨拶をして中に入り、荷物をきちんと置き、礼儀作法を教わり、お茶をいただくためには待つこと、隣の友達よりも先にいただく時には、「お先にいただきます」と一言、気遣いを自然に受け入れている様子でした。  
子どもたちに喜んでもらえるように、少し薄めに点てたお茶と先生が吟味したお菓子をどの子も「おいしい！」と言っていたりしていました。お茶を自分で点てたり、運ぶお手伝いをしたりして楽しんでいる姿が印象的でした。  
帰る時にはまた、ボランティアさんが子どもたちの挨拶を受け、「また待つているからね」と声をかけられていました。きつと、子どもたちは、このお茶会の雰囲気が好きなのではなかなと感じました。

### 子どもたちには、基本的な礼儀作法を学んでほしい



スクールボランティアで茶道を教える  
**谷津洋子さん** (上下西宿・7区) **Yoko Yatsu**

「こういふときにお辞儀をするんだな、隣の人より先にお茶をいただくときは『お先にいただきます』と言うんだなというように、子どもたちは茶道で基本的な礼儀作法を学ぶことができます。『わたしにできることない?』と、自分からお手伝いをかけてくれる子もいます。その成長が本当にうれしいですね」



お抹茶  
おいしいよ!

茶道具も本物を使用しています



←3月のお茶会ではおひな様を飾り、子どもたちに春を感じてもらおう雰囲気づくりをしました

### そこには、子どもたちを見守るやさしい目線があった…。



●取材を終えて●

## たくさんのお出合いに感謝を込めて

学校へ足を踏み入れることは、敷居が高いと思っていたのに、スクールボランティアとして一歩入ってみれば、先生がたは大きな声で挨拶をしてくださり、笑顔で出迎えてくれました。子どもたちの弾ける笑顔や、ふだんの表情を垣間見ることでもできました。スクールボランティアという外からの風が入る環境は、子どもたちにとっても居心地のいい学校なのではないでしょうか。  
現在約50人ほどのスクールボランティアの登録があるそうです。ボランティアのお誘いをすれば、快く引き受けてくれる地域の人たちが支えてくれています。自分の子どもにしてあげたいことは、地域の子もたにもしてあげたい。常に、子どもと同じ高さの目線で接している姿、それが、私が取材を通して感じた「子どもたちを見守る目線」でした。  
取材にご協力いただいた皆さん、どうもありがとうございました。

街角特派員 浅海優子